

# ラオスからの便り

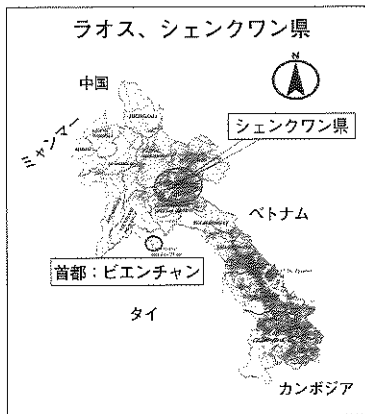
福山 喜文 陸自78

はじめに

現在、私はNPO法人日本地雷処理を支援する会（JMAS…注1）の現地代表としてラオス北部シェンクワンの県都ポーンサワンに駐在しております。陸上自衛隊を退職して以降67歳にして久々の野外での仕事にやりがいを感じているこの頃です。（注1…自衛官OBを中心に、紛争後の国で地雷・不発弾処理、地域復興支援、能力構築支援を実施するNGOです。現在4カ国（ラオス、カンボジア、パラオ、ミクロネシア）で活動しており、ラオスは2006年から支援しています）

朝08・30頃にJMAS事務所をピックアップ・トラックで出発し、街中の市場で昼食用の弁当を購入し、車で1時間程度の距離にある不発弾処理現場へ向かいます。現場ではラオスの不発弾処理機関「UKO Lao」（ラオス政府が管轄する不発弾処理組織で、1996年設立以降ラオス

全土で不発弾処理や啓蒙活動を実施）が不発弾の探査活動を継続しており、これと共同してコマツのショベルカーを改良した不発弾除去機により不発弾処理を指導・監督するのが私の日課です。



## インドシナ戦争と不発弾処理

ラオスは第2次インドシナ戦争（注2）中の1964年〜73年の間に米軍により58万回以上・200万発に及ぶ爆撃を受けました。この中には約2億7千万発のクラスター子弾が含まれ、そのうち約8千万発が不発弾となつて残存すると推定される他、大型爆弾、砲弾等の不発弾が

大量に残っており、国土の約3分の1の地域が不発弾で汚染されている世界有数の不発弾汚染国です。

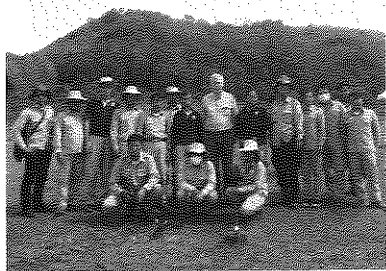
（注2…一般にインドシナ戦争とは1946年〜54年のベトナム民主共和国とフランスの戦争を言いますが、これを第1次インドシナ戦争、1965年から75年までのベトナム戦争を中心としたベトナム、ラオス、カンボジアにおける左右両派勢力の覇権争いを第2次インドシナ戦争と言う場合もあります）

1964年からこれまでの不発弾による死傷者数は5万人以上とされ、直近の10年間においても106名が死亡、359名が負傷するとともに不発弾の存在は国土開発や農業にも大きな障害となっているものの、汚染地域の特定と汚染地域の不発弾除去は殆ど進んでいない状況にあり、全ての不発弾を取り除くには200

年がかかるとも言われています。今でも、道路沿いには放置されたソ連製軽戦車PT76の残骸があります。1975年まで続いたベトナム戦争時に、ベトナムや北ベトナム軍による南ベトナムへの攻撃作戦の補給線であるホーチミンルートを通り、これに對抗し

てラオスで活動した北ベトナム軍が使用していたものです。その際に米軍側により使用されたクラスター子弾等の不発弾処理を現在我々が行っているところです。

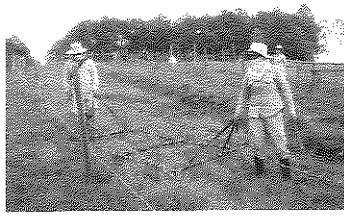
不発弾処理という危険度の高い仕事には、ラオスの不発弾処理機関「UKO Lao」の研修で資格を取得した者があたります。左の写真は、処理現場において「UKO Lao」の仲間とともに撮ったもので、右から5人が筆者です。



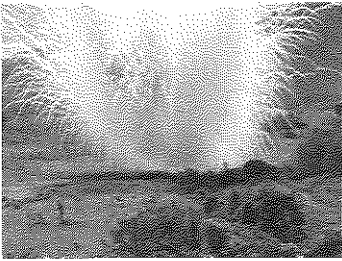
処理の工程は大きく分けて2段階あり、①探知器による探査と②機械処理または爆破処理となります。まず、対象地域をラージループと呼ばれる探知器で不発弾を探し、反応した箇所には杭を立て、次により精密

に探查できる探知器を使って更に綿密な探查を行い反応した場所を掘り起こし、不発弾だった場合には杭を立てて印をつけます。クラスター子弾は原則移動禁止であるため、発見された場所から動かさずにその場で処理を行います。

JMASは、不発弾除去機を使い不発弾の探查及び処理を迅速化する支援を行っており、これまでに約6



探知機による探查



爆破処理の様子

00以上の地域を安全化し、約8700発の不発弾を処理してきました。安全管理に気を遣う危険度の高い仕事ですが、ラオスの人々の安全や生活向上に役立っていることへの手ごたえを感じております。

### ラオスという国

この機会にラオスについて皆様にご紹介したいと思います。ラオスの面積は本州とほぼ同じ24万平方メートルで、人口は約750万人です。地理的には、インドシナ半島の中央に位置し、中国、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーと国境を接する東南アジア唯一の海のない内陸国となっています。そして、隣国タイとの国境を流れる長大なメコン河は、ラオス南部でメコン河最大のコーンパペン滝にさそぎられ、外洋に出ることはできません。

また、ラオスの電源構成はほとんどが水力発電で、発電電力の約8割を、タイやベトナムなどの周辺国に輸出していることから、「東南アジアのバッテリー」と言われています。そして、今から約50年前、同国の命運をかけたダムならびに水力発電所を命懸けで作ったのは日本人であり、

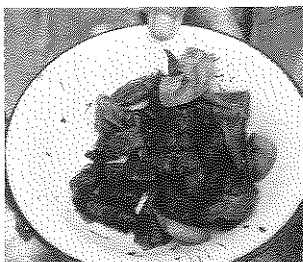
JICAの青年海外協力隊が初めて派遣されたのもラオスですので、日本との関係には深い歴史があります。ここでは、ラオスに赴任して以来、私が感じた驚きや発見について述べたいと思います。

まず一つ目は、私のいるラオス北部のシェンクワン県は標高が1000メートル程度の高原地帯であり、意外と涼しいことです。現在は雨季であり、比較的暑い時期ですが、朝は大体22℃と気温は安定しており日中もそれほど暑くなることはありません。むしろ乾季になれば相当寒くなることと、ダウンコートが手放せなくなるようです。ラオスの暑さのイメージは雨季の平均最高気温が33℃を超える首都ビエンチャン等の低地の暑さから来ていると思われれます。

二つ目は、ラオスの食文化です。家庭料理は全般的に唐辛子等を使ったスパイシーな料理が多く油断していると痛い目にあります。しかし、町の食堂においてはラオス定番の麺料理カオピアックを楽しむことができます。米粉で作った麺に鶏ガラ出汁が利いており日本のラーメンに比肩する美味しさです。また、コメを使った料理も多く、私の定番はカオ

カムという料理でご飯とともに味の付いた肉やゆで卵をのせ野菜を添えたものです。

そして、ラオスでの驚きは、なんでも料理して食べてしまいうことです。写真は、探查地域での昼食の際に供された蟬ですが、現地で捕まえたセミの羽をむしり、油で薬味と一緒に炒めたものです。最初は驚きましたが食べてみると塩味が利いてなかなかの美味です。



蟬の油炒め

同様に、コオロギ、イモムシ、カエル及びヘビなども食べられており、それなりに美味しくいただけです。また、当地では雨季にキノコがよく採れ、中にはかなり大きく育ったキノコもあります。シェンクワンの県都ポーンサワンが所在するベック郡の「ベック」とは日本語で「松」を意味しますが、実際、当地にはベック郡を

中心として松の木が多く、一部の地域ではマツタケも採れます。また、大戦後に当地に残留していた日本人が希少なマツタケを食して若さと健康を維持していたという逸話が残っており、ラオスにおいても日本同様、高級食材として広く認知されており、シエンクワン名物となっています。

他方で、ラオスには、薬効・健康増進効果等の有効成分を持つ植物が2〜3千種も存在すると推定されており、市場では薬木や薬草を売っている風景をよく目にします。例えば薬木にはそれぞれ、元気が出る、胃腸が整う、小水の出がよくなる等の効能があるとされ、朝鮮ニンジンも焼酎につけると同様、ラオラオという米から作られたラオスの焼酎につけて飲まれています。高級な薬木の入った焼酎は中国人がまとめ買いして本国に持つて帰ることが多いようです。もちろん私も色々ラオラオ焼酎に入れて試していますが、気のせいか一定の効果はあるように感じております。

なお、日本のツムラ製薬もラオス南部のサラワン県で原料生薬の栽培などを行う現地法人ラオ・ツムラを設立し、2011年には生薬調整加

工場を建設しており、原料生薬の栽培から生薬調整加工をラオスで行う等、原料生薬の約5%を調達しているようです。このときのツムラの生薬栽培用地の不発弾処理については、ODAの官民NGO連携事業としてJMASが民間の不発弾処理会社の監督業務を担当しました。

驚きの三つ目はラオスではSNSが盛んに使用されていることです。ラオスのような開発途上国においては、固定回線のインフラが不十分なことから通信回線はいきなりモバイル回線から発達しており、比較的大きな町では4GやLTE回線が使われる場所もあります。その他の地域でも、3G回線が繋がる場所が多くあります。中でも、モバイル回線を通じたフェイスブックの使用が盛んです。幅広く交流を持つている人と友達になるとこれを通じて友達の輪が瞬く間に広がり、相手の判別が困難な状態となってしまいます。私も、ラオスに来て初めてフェイスブックを使い多くの人と交流をするようになりましたが、情報の伝達が早く何かと便利です。また、色々と皆で集まって飲む機会が多いですが、集合時間通りに始

おわりに

まることはなく、早くても30分は遅れるのが常態です。親睦会等においては、カラオケ焼き肉店等に行くことがあり、日本のかつと同様に居酒屋やスナックのようなどころで歌うのですが、日本のカラオケボックスとは違い、選曲にはユーチューブも使われます。カラオケ音源に曲がなければユーチューブで歌を検索し、その中からカラオケバージョンを選び、日本人は日本の歌を歌い、ラオス人はラオスの歌を歌うのですが、それなりに盛り上がります。

最後になりますが、私は陸上自衛隊の第4普通科連隊を皮切りに最後は情報本部で退職しました。私にとって、JMASのようなNGOで国際協力の機会を持てたことは大きな喜びです。これから自衛隊を定年で退官される皆様も、職務で培った経験や知見を活かし、このような海外での国際協力活動に携わることを選択肢の一つとされることを期待しております。

(編集委：本稿はJMASの許可を受け、掲載させていただきました)